

西洋近世哲学と神

山田弘明

目次

- 研究生活を振り返って
 - 京都、フランス、アメリカ、名古屋
- ・西洋近世哲学と神
 - なぜ神か、近世哲学の神とデカルト、
 - 心身問題と神
- ・おわりに

京都大学文学部



野田又夫(1910-2004))

フランス・リヨン大学



G. ロディス・レヴィス先生



G.Rodis-Lewis (1918-2004)

アメリカ・プリンストン大学



マーガレット・D・ウィルソン教授

M.D.Wilson(1939-1998)



名古屋大学文学部

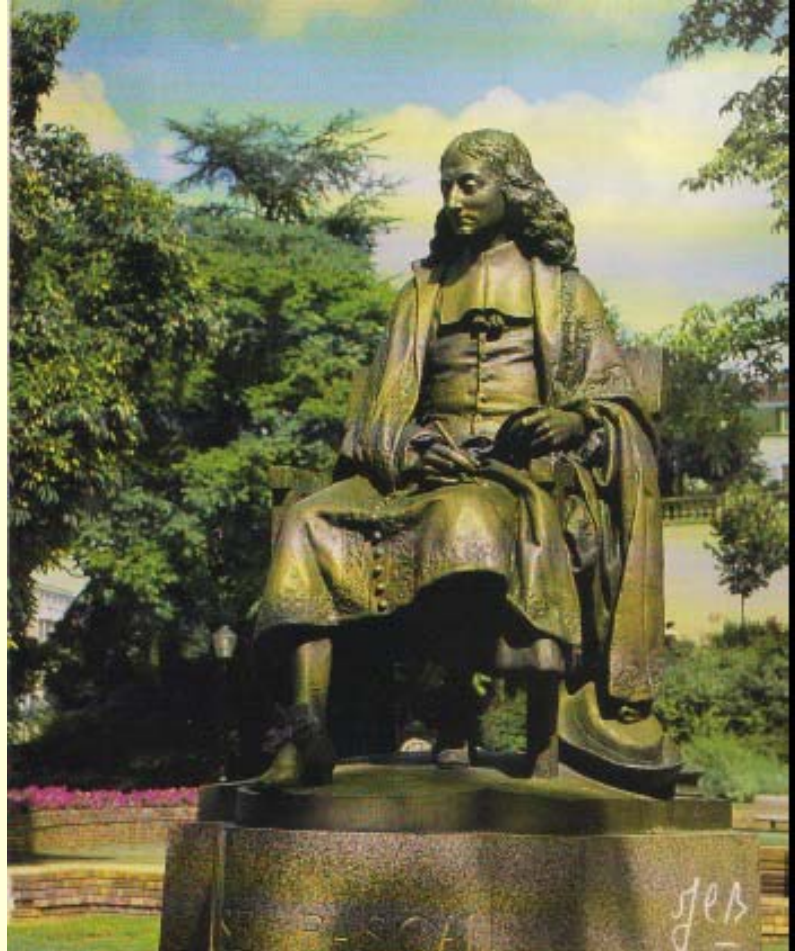


なぜ神か

- 「私はただ神と精神とだけを知りたい」(アウグスティヌス「ソリロキア」1-1)
- 「この世界を奥の奥で統一しているものを知りたい」(ゲーテ「ファウスト」悲劇第1部、夜)

パスカル1623-1662

「哲学者や学者の神
でなく、キリスト者の
神」(『覚書』)



パラダイムとしての神

- その時代に支配的なものの見方、共通の思考の枠組。
- 世界は経験的には説明しきれない。神という装置によって世界を根本から整合的に説明。

ライプニッツ1646-1716



若きライプニッツの選択

- 「機械論が勝利して数学をやることになった。...だが機械論と運動法則そのものの究極の理由を求めたとき、数学においてはそれが見いだされえないことに驚き、私は形而上学に戻らねばならなかった。」(レモン宛書簡1714.1.10)

スピノザ1632-1677



スピノザの神

- 永遠で必然的な実体。
- 偶然的な出来事も神の必然による。
- 世界は、神の無限な本質から演繹的・必然的に産出。

ライブニッツの神

- 予定調和
- 充足理由
- 最善を選択した神

パスカルの神

- ・神の存在証明は徒勞
- ・「無益で不確実なデカルト」(『パンセ』B78)

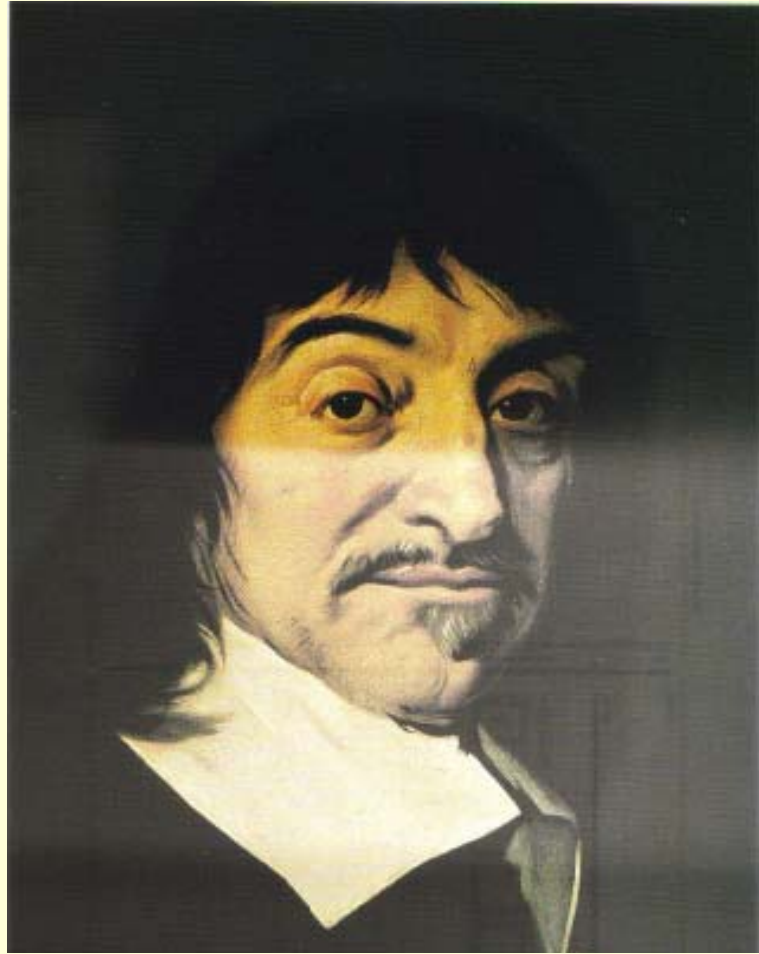
カント1724-1804



カントの神

- ・神の存在証明は論理的に不可能。
- ・神を論じることは理論理性の領域を超える。
- ・道徳的実践の領域においてのみ可。

デカルト1596-1650



デカルトの神

- ・哲学の問題として神を問う。
- ・神は世界を説明するための一つのパラダイム。
- ・神は超越でなく、観念として内在。
- ・創造者としての神を非神話化。
- ・人間を無限や永遠とのかかわりで捉える。

心身問題

- 精神(思考)と身体(延長)は独立な実体として区別される。
- 異質な実体がなぜ相互作用するか。
cf・松果腺、実際の生

スピノザ・ライプニッツの見方

- 心身並行論(パラレリズム)
精神(思考)と身体(延長)は神の二属性。
- 予定調和
神が心身を予め調和するように設定。

神の力

「神が、精神と身体という実体をどれほど密接に合一したとしても、両者を分離させるための力potentiaを、そのために放棄してしまうことはありえない。

「神によって分離され、別々に保存されるものは、実在的に区別されたものであるから。」
(『哲学原理』1-60)

心・身は神において同根

- 神の力とは、ものを創造する力であり、かつ心身を独立な実体として保存している力。
- 心身を区別している同じ神の力が、心身を合一させている。
- 精神と身体とは、区別においてであれ合一においてであれ、存在論的には同根。

おわりに

- **学問への厳格な姿勢**
ことばを大切に**する**。明晰にものを**考え**、
表現**する**。テキストを精密に**読む**。自分の
頭で問題を**分析する**。
- **無限な全体の視点からものを考える。**
例) 環境倫理の問題。